The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創造的思考に関するプロセス分析手法の開発およびその評価
Author(s)	山口, 洋介
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72469
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　山口　洋介　　）	
論文題名	創造的思考に関するプロセス分析手法の開発およびその評価

論文内容の要旨

本論文では，創造的思考のプロセスの解明を目指して，新たな分析手法の開発およびその評価を行った。そのために，次のような３つの目的を設定し，それぞれについて検討を行った：（１）創造的思考の概念や理論に関する先行研究の整理，（２）創造的思考プロセスに関する分析手法の整理，（３）既存の分析手法に関して欠けている内容や問題点を改善するための新たな分析手法の開発。

第１・２章においては，創造的思考の定義や評価方法，プロセスなどに関する知見について，レビューを行った。創造的思考に関する個々の研究結果は，ばらばらに散逸する傾向にあり，体系化があまりうまく進んでいないというのが現状である。その大きな原因の一つとして，創造的思考の概念や評価方法に対する解釈の仕方における混乱が挙げられる。そこで本論文においては，創造的思考の定義に関して本質的に検討するとともに，各評価方法に関して，創造的思考プロセスにおけるどの側面を測定しようとしているのかという観点から捉え直すことを提案した。特に，使用されることの多い拡散的思考課題に焦点を当てて，創造的思考力の評価において一定の妥当性を有する可能性が高いことを示した。これによって，先行研究同士を有機的に関連づけながら，統合していくことのできる方向性の一つが示唆された。プロセスに関しては，意識的な処理の側面に関する知見をまとめるとともに，近年の神経科学的な手法の発展によって明らかにされてきた無意識的な処理の側面にも着目し，両者の関係性について理解を深めた。

第３章から第５章にかけては，創造的思考の認知的プロセスに関する分析手法について，従来用いられてきたアプローチを整理するとともに，改善するための新たな分析手法の開発を行った。具体的には，３つの異なる手法を提案し，その有用性について検証した。第一に，創造的思考の阻害につながりうる信念の程度を測定するための尺度を開発した。創造的思考に関して信念に焦点を当てた実証的研究は，これまでほとんど行われてきていない。しかし，行動の背景にはその人なりの信念が潜んでおり，信念について解明することによって，行動をより深いレベルで解釈することが可能になるだろう。本論文では，才能志向や現実性志向などといった多面的な信念が見いだされるとともに，これらの信念が創造的思考態度および拡散的思考課題における成績との間でネガティブな関連性を有していることが示された。こうしたことから，信念の段階を含めて，創造的思考プロセスを捉えることの重要性が指摘された。第二に，思考プロセスに関する新たな同時的報告手法として，タイピング思考法を提案した。タイピング思考法とは，課題を遂行している間，考えていることをそのまますべてタイピング（キーボード入力）によって報告を求めるという手法である。従来，同時的報告手法としては，発話思考法の他に選択肢がほとんど存在していなかった。アイデア生成課題に関して，タイピング思考法を用いて収集されたデータから，幅広い創造的思考方略が見いだされるとともに，時間の経過につれて思考内容が変化していく様子を推測することに，一定の成功を収めることができた。さらに，個人特性として対人的な緊張のしやすさに着目した分析の結果，緊張を感じやすい者において，発話思考法に比べて，タイピング思考法の方が報告に対する心理的な抵抗がより小さくて済むということが示された。同時的報告手法から得られる情報量は非常に多く，思考プロセスの推測における中心的なアプローチとして位置づけられる。発話思考法とは異なる特徴を有する手法として，タイピング思考法に一定の有用性が認められたことの意義は大きく，問題内容や参加者の個人特性に応じて使い分けていくことができるという可能性が示唆された。第三に，生み出されたアイデアについて系列位置の観点から分析するというアプローチを提案した。系列位置とは，アイデアが生み出された順番を指す。従来の分析手法においては，一定時間ごとに区切る手法や，前半部と後半部に分ける手法が用いられてきた。しかし，アイデアを生み出すペースに個人差が見られるという点や，前半部と後半部を

分ける境目が人によって大きく異なってしまうという点において，それぞれ問題を含んでおり，こうした区分の仕方に積極的な意義を見いだすことは困難である。それに対して，系列位置はより実体として明確な意味があり,思考プロセスに関してより有益な情報が含まれるのではないかと考えられた。実際にデータを収集し分析した結果，創造的なアイデアが生み出される確率が系列位置によって異なることが示された。思考プロセスには，既有の知識構造が少なからず関係している。そのため，アイデアが生成される順番に個人差が生じるのは当然であるが，多くの参加者からデータを収集してマクロな視点で捉えることで，一般的な傾向を見いだすことができるという可能性が示唆された点において興味深い結果であると考えられた。

本論文では，創造的思考プロセスの解明に向けて，幅広い国内外の先行知見を整理することで，これまでの混沌とした研究状況の体系化を図るとともに，いくつかの新たな分析手法を提案し，その有用性を示した。創造的思考のプロセスは，「こうすればよい」といった決まった手続きや答えが存在するわけではなく，非常に複雑で難解な現象である。どのような手法であっても，一つだけでは活動の一側面しか捉えられていない恐れがあり，認知的活動の全体像を把握するためには，複数の手法を用いてデータを収集することが重要である。より精度の高いデータを得るために，今後も，新たな手法の開発を絶えず試みると同時に，それぞれの手法の利点や欠点に関して着実に理解を深めていくことが求められる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　山口　洋介　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	三宮　真智子
	副 査　名誉教授	前迫　孝憲
	副 査　教授	西森　年寿

論文審査の結果の要旨

本論文は，創造的思考に関する国内外の幅広い知見を体系化するとともに，思考プロセスに関する新たな分析手法を提案したものである。創造的思考力の育成は，学習指導要領において主な目標の一つとして掲げられているように，多大な社会的関心が向けられるテーマである。学術的にも研究数が増加傾向にある一方で，現象の複雑さ・難解さゆえに，多種多様な知見が入り混じっており，なかなか進展が見られにくい研究分野でもある。

第１・２章では，創造的思考に関する研究についてレビューを行い，先行知見に基づきながら提案を加えることで，理論的な発展を試みている。具体的には，創造的思考の定義や評価方法，ひらめきが生じる機序などの観点について検討がなされた。創造的思考は捉えどころの難しい，曖昧な部分を含んだ現象であり，そうした点に関する共通認識の欠如が，研究の発展において大きな妨げとなっていると推測される。本論文では，創造的思考に関する誤解や混乱をなるべく解消し，包括的な理解を構築することを目的として，理論的な精緻化の方向性が示された。

第３章から第５章にかけては，創造的思考の認知的プロセスに関する分析手法の整理，および，新たな分析手法の開発がなされた。第３章では，創造的思考の阻害につながる信念の強さを測定するための尺度の開発を行っている。思考内容に関するデータをいくら収集したとしても，その人がどのような信念や価値観を有しているかということは，なかなか見えてこない部分である。信念は思考プロセス全体に対して影響を及ぼし，密接な関係性にあると想定される。信念の側面を含めて思考プロセスを捉えることで，創造的思考をより深い次元で解釈できる可能性が示された。

第４章では，思考内容に関する同時的言語報告手法として，タイピング思考法と呼ばれる新たな手法を提案した。従来，同時的言語報告手法としては，発話思考法の他には選択肢がほぼ存在していなかった。タイピング思考法は，課題中に考えている内容を声に出すのではなく，コンピュータ上でタイピングして報告するという手法であり，より心理的な侵襲性が低くて済むこと，特に，対人的な緊張をしやすい者にとって，有用な手段であることが示された。さらに，発話思考法とタイピング思考法のそれぞれの特徴について理解を深めることを通して，同時的言語報告手法のあり方について検討がなされた。

第５章では，生み出されたアイデアについて系列位置，すなわち，生み出された順番の観点から分析するというアプローチについて提案を行っている。既存の手法における問題点を改善することを通して，創造的なアイデアが生み出される確率が，系列位置によって変動する様子を捉えられる可能性のあることが示された。思考自体に影響を及ぼさず，参加者の主観的な言語報告にも依存しない，独自な性質を備えた分析アプローチとして意義が認められた。

以上，本論文では，創造的思考に関する国内外の先行研究が論理的かつ丁寧にまとめられており，創造的思考に関する理論の体系化に大いに寄与するものであると考えられた。さらに，創造的思考の認知的プロセスに関して，３つの独創的な新たな分析手法が提案された。それぞれの手法に一定の有効性が示され，今後の実証的研究の発展につながることが十分に期待される。よって，本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。